neo

MEDICAL INFORMATION MAGAZINE

Winter
2025
#06

希望あふれる日々を医療と共に。

福井大学医学部附属病院
第一外科 教授
五井 孝憲

山内整形外科
院長
山内 健輔

福井愛育病院
笠松 泰江 / 吉川 真弓 / 芝 梨恵

neo
MEDICAL INFORMATION MAGAZINE

Contents

02 Doctor's Hand
福井大学医学部附属病院 第一外科 教授
五井 孝憲

10 Medical LANDSCAPE
山内整形外科 院長
山内 健輔

16 Very Human
福井愛育病院
笠松 泰江 / 吉川 真弓 / 芝 梨恵

STAFF

Project Design 坂口 俊克
Editor 水野 裕美
Writer 上乗 繁能／若井 憲
Photographer 藤森 祐治
Designer 吉田 真人／西村 恭子
Cover Design 101%

発行／スギメディカル株式会社
〒101-0044
東京都千代田区鍛冶町二丁目６番１号
堀内ビルディング２階
TEL: 03-3254-1335 FAX: 03-3254-1339
E-mail: t.sakaguchi@project-ishin.net

Design Your Smile
健康創造のスズケングループ

SUZUKEN

地球の健康とすべての人々の健康で
豊かな生活に貢献したい。
それが私たちスズケンの壮大なテーマです。

スズケンの事業領域は、健康創造。医薬品流通業界のリーディングカンパニーとして医薬品・医療機器の供給をはじめ健康に関するあらゆる分野でお役に立てるプライム・ベンダーをめざしています。

株式会社スズケン
本社／名古屋市東区東片端町8番地 〒461-8701 TEL(052)961-2331
https://www.suzuken.co.jp

GOI TAKANORI

University of Fukui Hospital

Doctor's Hand

先進的な医療と地域完結
難治性のがん治療に挑む

ロボット支援手術のプロ

「大学病院として難治性の病気の克服に挑戦しつづけることはもちろんですが、最先端医療の研究、開発、実践に努めながら、地域の医療機関と連携し、地域完結型の医療をめざしていく。その両方の使命を果たすことが重要だと思っています」

県内唯一の特定機能病院である福井大学医学部附属病院は、高度急性期や先進的な医療を担う一方、地域の中核病院としての機能も併せ持つ。第一外科を率いる五井孝憲教授の言葉は、そのことを示している。

高度で専門的な医療を極める「攻め」の部分と、新たな治療法や技術を地域に還元する「守り」を大切にする。そこに、五井教授の人柄と地域医療に対する思いの一端が垣間見える。

第一外科が得意とするのは、患者への負担が少ない低侵襲の腹腔鏡手術や、支援ロボットを使った手術だ。診療科としては消化器外科、乳腺・内分泌外科、小児外科を包括するが、中でもとくに食道、胃、大腸、膵臓、肝臓などの疾患に対し、手術適応を厳格に見極め、幅広く対応する。

「腹腔鏡は、傷が少なく体に優しいのが特徴です。ロボット手術はさらに侵

neo MEDICAL INFORMATION MAGAZINE

襲が少なく、画質も良く、さらに強拡大が可能です。鉗子の先端が手のように自由自在に動かせるので、より繊細な手術を可能にしてくれます。ロボット手術による大腸がんのうち、直腸がん、結腸がんが現在、保険適用となっており、手術を受けた患者さんは、翌日にはもう歩けるぐらいで、体への負担も少なく、表情もすこぶるいいと感じます」

五井教授は、日本内視鏡外科学会からロボット支援手術のプロクター（手術指導医）に認定されている。消化器外科を専門とする医師の約数％と数少なく、ロボット支援手術は難易度が高いことから、経験の浅い医師はプロクターの立ち会い下でしか手術ができない。第一外科は、その技術を学べる数少ない施設としても注目されている。

細胞のストレス値を測定

五井教授は、治療後の体の状態をより科学的に証明するために、数年前から新たな取り組みを始めた。それが、患者の細胞が感じているストレス値を事前に測定し、治療によってどういう変化があるかを検証する方法だ。

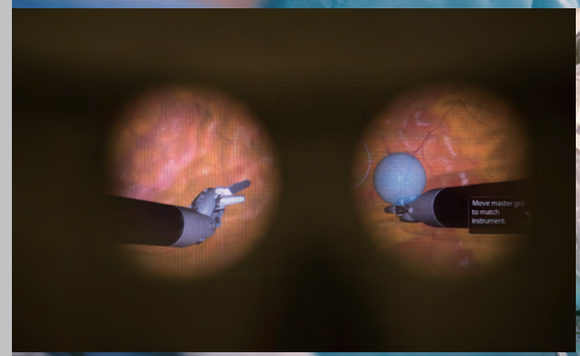
例えばがんを発症した場合、体の中の正常細胞は、がん細胞を異物とみなし、その時点で細胞はストレスを感じ始めるという。ただ、がん細胞がまだ小さい間はわかりにくく、進行するにつれて徐々に体の中の細胞のストレス反応は大きくなっていくそうだ。

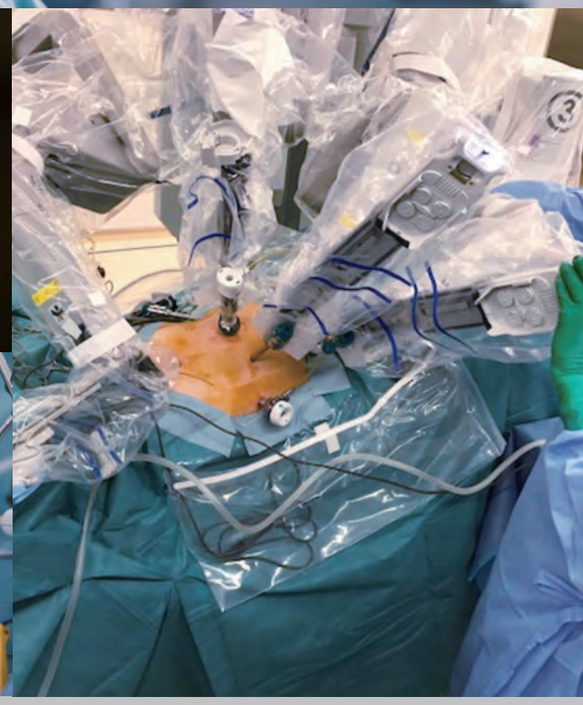
それゆえ、あらかじめ細胞が感じているストレスを測定しておくことで、ステージが進むとどうなるか、術後にそれがどう変化しているかを比較、検証することができる。それによって、治療後の患者の状態をより科学的に立証できるわけだ。

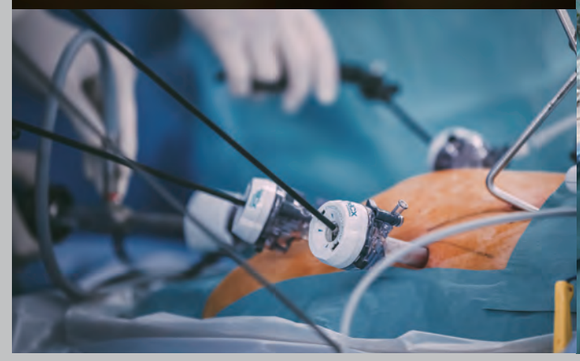
「細胞が感じるストレスを感知する測定器を使って調べます。今まで5本ほど論文にしていますが、たとえば大腸がんの場合にリンパ節転移を起こしたり、血液中に入って肝転移を起こしていると、体の違うところでストレスを感じ始めます。要するにステージが上がるにつれて、酸化ストレス値が上がっていくわけです。それは、がんだけではありません。体に負担がかかるものであれば、注射一つとっても細胞はストレスを感じます」

細胞が感知するストレスとは、体が疲れた時とか、われわれが普段感じている心因的なストレスとは違う。五井教授は「心因的なストレスを感じるからと思って測定器で測っても、細胞が感知するストレス数値が上がるとは限

GOI TAKANORI







りません」と指摘する。

肝転移を見極める指標

では、数値を事前に測ることによって、治療や手術にどういう影響を及ぼすのか？

「わかりやすいのは、術後です。たとえばがんの手術は、ステージや転移の状況、腫瘍の大きさなどによって切除する範囲が決まります。その基準に従ってがんを切除後、細胞のストレス値を測ったら、仮に数値が高かったとします。病変を切除したにもかかわらず、酸化ストレス数値が高いとなると、がん細胞または異物がまだ体の中に残っている可能性があることを示しています。それは画像ではなかなか掴めません。酸化ストレス値が上がっているのは、がん細胞が血液中にいる、または見えないところで広がる可能性がある。そこで、例えば補助化学療法をしっかり行った方がいいという判断になります」

第一外科では今、術後1ヶ月にわたって、採取した患者の血液中にがん細胞がいるか、いないかを見極める臨床試験（全国試験）を行っている。がん細胞がいないと確認されれば「再発や肝転移の可能性は極めて低い」と判断される。逆に、1ヶ月後もがん細胞がいるとわかれば「再発する可能性が高い」と見なされる。ただ、これはあくまでも肝転移の場合だ。

再発や転移には「腹膜転移や肺転移もあり、その場合は血液中とは限りません。血液の中に、がん細胞がいないからといって、腹膜播種は起こさないとはいえないし、他のリスク因子の可能性も考えられます」と、五井教授は推測する。

実際に、大腸がんに関しては、ステージを決定している、または再発に関わる因子についてガイドラインに記載されているが、今回の細胞ストレス値を事前測定することで、血液の中のがん細胞が残っているか否かを見極める方法はまだ含まれていない。それゆえ五井教授は、様々な転移について見極める新たな指標の一つになると考えている。

「再発や転移のリスク因子が陰性なのに、再発する症例があります。フォルスネガティブと言いますが、これをなんとかしてもっと簡便な方法で見つけることはできないかと思ったのがきっかけです。これまで症例を経験する中で、ストレスの測定値をもとに再発、転移を防いだケースもあります。世の中にはまだ広く普及していませんが、私は大腸がんだけではなく、他のがんでも応用できると思いますし、心臓など良性疾患でも見出すことができると思っています」

保険収載への道を開く

五井教授が専門とする大腸がん領域では、腹腔内が粘液で覆われる腹膜偽粘液腫や癌細胞が広がる腹膜播種に対する「完全減量手術＋腹腔内温熱化学療法」も注目を集める。日本には、この治療を受けられる施設がほとんどないことから、患者は全国から訪れる。治療成績もすこぶる良好だ。

五井教授は現在、大腸がんと腹膜偽粘液腫の治療法を研究する研究会の責任者を務めており、腹膜内温熱化学療法では国内の第一人者。この治療法が特筆されるのは、これまで手術が難しいとされてきた腹膜播種や腹膜偽粘液腫に対し、〝外科的〟治療を施し、さらに温熱化学療法でがんを取り除く点にある。

「腹膜播種は、これまで国内では手術をしないケースがほとんどでした。結果的に、それがこの分野において世界と日本の圧倒的な差になっています。世界的には1999年にガイドラインが発表されていて、肉眼的な播種は腹膜も含めて切除し、残ったがんについては温熱化学療法で取り除くことが示されています。当院では20年以上も前

GOI TAKANORI

から取り組んできていますが、日本ではまだ遅れていることから2年前に腹膜播種研究会を立ち上げ、腹膜内温熱化学療法を保険収載できないか、国と交渉してきました。結果、まずガイドラインをつくろうということになり、その道筋を整えているところです」

保険収載への道を開いたことで今後、福井大学病院発の「腹腔内温熱化学療法」がますます脚光を浴びる日も遠くないであろう。

五井教授は、研究分野でも実績をあげている。その一つが、抗PROK抗体の大腸がんに対する新規治療法としての可能性を評価され、特許を取得したことだ。大腸がんにおける「新規創薬」につながる研究として期待されている。

地域完結型への連携

消化器や乳腺・内分泌外科の疾患を中心に、最先端医療や新しい治療法の開発に取り組む一方で、五井教授は地域との連携にも力を注ぐ。高度かつ専門的な医療を担う大学病院と、地域の医療機関、福祉施設、行政機関と連携し合いながら、切れ目のない医療を提供できる体制を整えるのも、大学病院の使命の一つと考えている。

近年は、高齢化や人口減少が進み、これまでの病院完結型から、住み慣れた地域全体で患者を支えていく「地域完結型」医療へ切り替わりつつある。医療機関の機能分化も進んできており、診療所やクリニック、基幹病院や大学病院それぞれの役割を分担し、相互に連携を図る病診連携がますます重要になってくる。

その連携を支えていくのが、第一外科で診療や手術手技をしっかり身につけ、地域や国内外の第一線で活躍できる若手医師の存在である。

しかし悩ましいのは、外科を志す医師の数が年々減少傾向にあることだ。中でも、五井教授の専門である消化器外科の領域は、深刻な状況にある。

「今から25年前は、消化器外科医が1500人ぐらいだったのに対し、今は500人ぐらいでほぼ3分の1です。消化器外科学会に所属している外科医も、10年ぐらい前まで2万3000～2万5000人ぐらいいました。それが2024年で1万8000人ぐらいにまで減少しています。このうち、若手と言われる25歳以上44歳ぐらいまでの人は約30%です。7割は45歳から65歳の医師で、このままだとますます高齢化が進んでいくでしょう」

若手医師の育成が急務であるのは間違いない。五井教授は「現在、外科医を志す女性医師が増えています。福井県は全国でも共働き率が高く、教室自体が女性医師の就労に関し、柔軟に対応するシステムを構築している」と期待を寄せる。外科医の面白さは「自分の手でがんを治せることだ」とも強調する。

「外科医としてオペ室に入らないと緊張感はわかりません。しっかり腫瘍が切除できて、患者さんが〝ありがとうございました〟と元気に帰っていく。その時に手術の辛さが全て吹っ飛びます。その喜びを、若い人たちに是非、感じてもらいたいと思っています」

地域の医療機関との密度の濃い連携により、地域完結型医療をめざす。五井教授と第一外科の真価が発揮されるのは、まさにこれからである。

五井 孝憲（ごい たかのり）

福井大学医学部附属病院 第一外科 教授

1989年　大阪医科大学卒業
1989年　福井大学医学部附属病院(旧福井医科大学医学部附属病院)
　　第一外科入局
1994年　長崎大学 腫瘍医学教室 研究員
1996年　福井医科大学医学研究科博士課程修了
1997年　米国 Tufts大学留学
1999年　福井大学医学部附属病院 第一外科 助手
2008年　福井大学医学部附属病院 第一外科 講師
2015年　福井大学医学部外科学(1)講座 准教授
2016年　福井大学医学部外科学(1)講座
　　(消化器外科・乳腺内分泌外科)　教授
2019年　福井大学 手術部長、福井大学 高難易度新規医療評価委員会 委員長、
　　福井大学 医学研究支援センター 研究・開発推進部長
2021年　福井大学医学部 副部門長、福井大学医学部 臨床研究審査委員会 委員長、
　　福井大学医療機器安全管理責任者、
　　福井大学 メディカルサプライセンター長
2023年　福井大学医学部附属病院　副病院長、
　　福井大学医学部附属病院　臨床教育研修センター長

ここで完結させ、頼られる地域医療を担う。

山内整形外科 院長　山内 健輔

開業以来の地域密着スタイルを進化させる

山内整形外科は大学や美術館などが近くにある福井市大宮で、昭和52年（1977年）に開業した。整形外科を中心とした有床診療所で、山内健輔氏が院長になってから10年が経つ。

「私が福井県立病院からここに戻ってきたのは2011年。それまでは大先生（院長の父で理事長の山内四朗氏）が外来診療を中心に1人でやっていました。オペ室もありましたが緊急手術などには対応できる状態ではありませんでした。オペ室看護師育成のために看護師を県内外の病院に連れていき、滅菌や物品の配置の仕方などを勉強してもらうところから始めました。1年後には病院を建て替え、その際には人工関節の手術を想定してクリーンルームを作りました。人工関節の手術となると習う先もなかなかありませんので、神戸市の人工関節手術を得意とする病院へスタッフを連れていき、滅菌からリハビリ、病棟の体制など、多くを学ばせてもらいました」と院長の山内健輔氏は話す。麻酔科医が非常勤で週に2日来ており、整形外科のほとんどの手術ができる体制を敷く。19の病床を持っているからこそできることは多い。

山内整形外科にはユニークな特徴がある。それはイベントが多いことだ。作品展や一月遅れのひな祭りなど、長年続けているものもあれば、落語会や人工関節の手術をした患者と一緒に出かける遠足など、山内健輔氏が院長になってから始めたものもある。また年に1回、『Wa』という80ページほどの文集も発行していて、院内のトピックやスタッフ紹介などもあり、これを読めば病院のことがよくわかる。1000部ほど発行して、院内などで無料配布している。文集の編集は部署をまたいでスタッフが持ち回りで行うことで、他部署のスタッフとの交流を盛んにするメリットもあるという。

できるだけ早く結果を出すことが診療方針

たくさんのイベントや文集発行などから、地域に親しまれる病院であることがよくわかる。地域での役割について尋ねてみた。

「整形外科の治療に関してはここでできるだけ完結させることを意識しています。特別なスキルや器械がないとできないことを除いて、たいていの疾患には対応できます。そして初診の患者に対しては、できるだけその日のうちに診断をつけて、その日のうちに治療をスタートさせることを心がけています。大きな病院だとMRIが混んでいて、検査は1週間後となることもよくありますが、当院では遅くても翌日か翌々日にはできますし、必要であればエコーで対応することも可能です。また、局所の問題は局所で治すという考えから、例えば五十肩の患者さんなど、エコーを用いた局所の注射などで治すことも多いです。薬と湿布だけで様子を見るのではなく、できるだけ医療機関でしかできないことを行い、その日のうちに『楽になった』を実感させてあげたいと思っています。また、例えば腰痛で来院して、注射まではいいと言われた時は薬と湿布を出しますが、それだけではなく、『ちゃんと運動をしましょう』などの今後の生活における注意点などのお話をすることで、いわゆる〝おみやげ〟を持って帰ってもらえるように気を付けています。肥満であったら痩せましょう、と話すこともありますし、食事の管理ができていなければ、当院は管理栄養士がいるので、食事指導の話もできますし、仕事が忙しいから運動ができていないと言う人には、隙間時間を探して、少しでもいいから運動習慣をつけてもらえるように指導することもあります。ただ痛みの治療をするだけではなく、リハビリや運動などの紹介をして、痛みの根本を改善するための日常生活指導などの〝おみやげ〟を渡すことで、治療効果を底上げする効果があると思います。そして入院・手術となっても、病棟やリハビリのスタッフが手厚い対応をしてくれます。地域への密着度は他の病院よりも濃いと自負しています」

医療行為をしているだけでは開業医はダメだという院長。

「大きい病院はそれなりの技術やマンパワーがあるのでそれでいいのですが、開業医はプラスアルファで患者満

Profile
山内 健輔（やまうち けんすけ）
山内整形外科 院長

［略歴］
1998年　金沢大学医学部医学科卒業
　　金沢大学医学部整形外科入局・金沢大学大学院医学研究科入学
1999年　厚生連高岡病院勤務
2000年　公立松任石川中央病院勤務
2001年　横浜栄共済病院勤務
2003年　カルフォルニア州立大学サンディエゴ校、アンチキャンサー社に留学
2006年　金沢大学医学部大学院博士課程修了
　　医学博士授与・金沢大学整形外科助教
2008年　福井県立病院整形外科医長
2010年　整形外科専門医取得
2011年　山内整形外科副院長就任
2014年　山内整形外科院長就任

足度を上げるような工夫をしないといけません。当院ではリハビリのスタッフが一所懸命作った運動のやり方を記したレジュメも用意してあり、必要に応じてお渡ししています。このように患者さん一人ひとりに手間暇をかけて、手厚くしているつもりです。だから外来は結構疲れますよ。1日200～300人は来ますので」

自分から動ける層の厚いスタッフが集まる

院長の気持ちを受けて、実践するスタッフも大変だと思う。そのために何か工夫をしていることはあるのだろうか。

「看護師は病棟と外来にいますが、持ち場を固定するようにしています。外来にいる人はずっと外来にいて対応の仕方を熟知していますから、『運動していますか?』『ちゃんと内服できていますか?』など、私が言おうとすることを先に聞いてカルテに記載してくれています。病棟の方も同様で、特別に指導しなくても、患者の状況を把握して行動してくれます。私の方からこうして欲しいということはほとんどありません」

病棟にはきれいにディスプレイされた本棚がある。毎年、「本屋大賞」にノミネートされた本が並べられ、それぞれの本にはおすすめポイントが書かれた看護師手書きのポップが添えられている。書きためたポップ（60～70冊分）はファイルに収められて、すべての病床の傍に置かれている。入院患者はそれを見て、読みたいと思った本があれば看護師に頼んで持ってきてもらう、そんなシステムだ。

「元々は年季の入った本棚だったので、それをどうにかしたいなと思っていたんです。そうすると看護師が本棚や観葉植物を買ってきて、きれいにしてくれました。気がつくとスタッフが何も言わなくてもやってくれる、自分たちで考えてやる、そういう風に自分たちで考えて行動できる体制がいいと思います。規模が小さな病院でも、これからはトップダウンでやっていける時代ではないと私は思っています。それぞれのスタッフが、自分が何をすれば患者満足度を上げられるか、職場環境が良くなるか、もしエラーがあれば、それをどうしたらいいのか、そういうことを自分たちで突き詰めていくことが大事だと思っています」

普段やっている仕事をただこなすだけではなく、1日1つ、小さなことでもいいので、気づきがあって、それを経験として積んでいって欲しいと考

え、QC活動にも取り組んでいる。

整形外科医の醍醐味は短期間で結果が出ること

実は高校生の時は勉強が苦手で、とても医学部に行けるような成績ではなかったという。ただ、数学だけは得意だったそうだ。

「数学の教師になりたいと言ったら両親に怒られて（笑）、一浪して金沢大学の医学部に合格しました」

新人医師の頃は、外来が忙しすぎてカルテをほとんど書かずに会計に送ったら、あとで先輩に怒られた話や、手術の計画を立てる際に、その時は頼れる先輩が近くにおらず、父親にレントゲン写真を送って相談に乗ってもらったりと、「今思えば恥ずかしかったり頑張ってたなと思う話はいっぱいありますよ」と笑う院長。整形外科医になってよかったなと思う瞬間についても聞いてみた。

「基本的に自分で手術をして治っていくのがいいですよね。短期間で結果が出るところが整形外科の医者になってよかったなと思うところです。他の病院で治らないと言われた神経痛を、エコーを用いたハイドロリリースで治せた時など、思わずガッツポーズをしたくなったことがあります」

多忙極まる院長だが、休日は山登りに出かけることが多いという。

「もともとはキャンプをしたいと思って道具も揃えました。ところが、土曜の午後は手術なので、考えたら2日間休みになることがほとんどないことに、道具を揃えてから気がついて（笑）。その代わりに今は、近くの5時間くらいで行って帰って来られる山に登っています。お気に入りは下市山（標高260m）や赤兎山（標高1629m）です。山の上で何を食べるかにこだわっていて、小さい鉄板を持って行き焼肉をしたり、食後は本格的にコーヒーを淹れたりしています。ずっと病院に閉じこもって仕事をしていると、開放的な山みたいなところに憧れるのかもしれませんね。あと最近はサウナにもよく行きます。夜にサッと行けるのがいいんですけど、でも整わないんです。仕事のこととかずっと考えてしまうので……。山登りも同じで、どうしてもモヤモヤしてしまうことがある時は、急な上り坂が続く、負荷の大きな山に登ります。きつくて何か考えている余裕なんてありませんから」

最近、リンパ浮腫治療の資格を取得した院長。それで資格試験の勉強をすることが面白くなり、勉強にも没頭し

医療を支える。
人と地域の未来のために。

私たちが幸せな人生を歩むために、医療は、必要不可欠です。
しかし、世の中の変化とともに、医療は今、多くの課題を抱えています。

医療人材の採用から育成、キャリア支援、仕組み作りまで
私たち MCS は、HR（ヒューマンリソース）の分野で、医療の課題解決に向き合います。
医療関係者、生活者、地域社会、その未来のために。

「地域」と「医療」の架け橋として ヒューマンリソースの問題をトータルで支援する

詳しくは WEB へ

スギ薬局グループ

MCS
Medical Career Support

ていると言う。今は「心電図検定」の勉強していて、それが取れたら「スポーツ医学検定」の取得を目指すそうだ。

「その後は少し難しいんですが、『心理学』の資格を取りたいと思っています。整形外科では精神的な不安が痛みに関係することがあります。以前、ある日突然歩けなくなってしまった患者さんが来て、私のところでは原因がわからず、神経内科の先生に診てもらったら精神疾患が原因だと指摘され、専門病院に入院して治療を受けたところ、普通に歩けるようになった症例を経験しました。職場でのパワハラが原因だったようです。これは最たる例ですが、整形外科的には原因が分からないことに、実はメンタルが絡むことがあるということをしみじみ感じ、心理的なところを勉強したいと思うようになりました」

このようにオフも結局はオンにつながることが多く、日夜ひたむきに医療に向き合っている。「じっとしていられない人」とよく奥様からも言われるとか。このような院長の姿を見ているからスタッフも率先して動いてくれるのではないか、そのように感じる。

患者さんを思い、医療全体の精度アップを図る

今後は医療技術だけでなく、看護のケアや入院中の食事など、院内全体の精度をもっと上げていきたいと話し、「当院はスタッフの層が厚いので、突き詰めればさらになんでもできると思います」とも。周術期の看護を手厚く行うことで患者の不安を軽減したり、術後の回復を早め合併症を予防するERAS（イーラス・術後回復強化）という管理方法を導入して、できるだけ手術を受ける患者に非日常を味わせないように全ての手術に対して行っている。このように診療の層を厚くしていきたいと話す。

「今は理事長と2人でやっていますが、私ができないことをカバーしてくれる先生と一緒に仕事ができたらさらに層も厚くなりますので、うれしいです」

福井県では有床で新たに開業することはできず、そうなるとできることは限られてしまう。さらにここには自ら動けるスタッフがたくさんいる。「そんな環境が気に入って一緒にやってくれる医師が来てくれたら」と話す。

患者ファーストを謳い、院長やスタッフの挑戦はこれからも続くが、地域にとってさらに頼りになる有床診療所へと着実に進化をしていくに違いない。

Very Human

福井愛育病院

妊娠から出産 子育て 親子の幸せを願い 見守り続ける

笠松 泰江
勤続年数26年　女性と子どもの健康支援センター

産婦人科と小児科に特化した専門病院

故郷の福井に心臓手術と周産期医療ができる病院をつくりたい。そう考えていた世界的な心臓外科の権威で、東京女子医科大学の榊原仟（しげる）氏が中心となり、昭和42年（１９６７年）に福井循環器病院が、そして5年後には福井愛育病院が誕生した。産婦人科と小児科を2本柱に、児童精神科、アレルギー科を標榜する女性と子どもの専門病院で、産婦人科54床、小児科37床のほか、ＮＩＣＵ／ＧＣＵも11床を有し、地域周産期母子医療センターとしての役割を担っている。２０２３年度の分娩数は１１５０件で、この数は県内はもとより北陸でもナンバー1だ。

産婦人科と小児科に特化した民間病院は県内ではここだけで、お産途中に赤ちゃんに少しでも異常が見られたら、小児科の医師が分娩室に駆けつけて診察をする。そして、福井循環器病院と連携して、重い心臓病の赤ちゃんは、手術ができる体制がとられている。

産婦人科病棟では、月に80～110件もの分娩を抱えている。師長の吉川真弓さんは、助産師でもあり、分娩には、胎児、産道、娩出力、お母さんのメン

タルの「分娩の4要素」のどれか一つが正常から逸脱してもうまく進まなくなることがあるため、「そのタイミングを見計らい、情報を医師に伝えながらスムーズに分娩に持っていく調整が私の主な仕事です」と、説明する。また師長としては、出産して退院する患者さんに、退院後の助言とともに、授乳をはじめとする育児技術の最終確認を行う。

「子育てに不安があるお母さんの場合、女性と子どもの健康支援センターに情報を入れて、1カ月健診などへとつなげています」

気がかりな親子を見守り、問題を未然に防ぐ

女性と子どもの健康支援センターとは、産後うつなどお母さんのメンタルの問題をチェックし、必要に応じてカウンセラーや行政機関へつなぐ院内の組織。笠松泰江さんは、看護師や助産師の長年の経験を生かし、女性と子どもの健康支援センターで妊産婦のメンタル部分に関わっている。

「1カ月健診の時に、産後うつ病のスクリーニングを目的とした『エジンバラ産後うつ質問票』を使って面接をしています。結果から私たちがどうにかするのではなく、必要に応じて、院内の母乳外来や、『気がかり親子連絡票』（妊婦・親子連絡票）によって市や町の保健所などへとつなぐのが私の仕事です」

また、妊婦の健康管理を指導する「ファミリークラス」も担当し、月に5～6日は病棟で看護師としても働いている。産後うつに関してはかなり突っ込んだ質問をする必要があるため、お母さんとの距離をあらかじめ縮めておくためにも、現場に立つ必要があると言う。

「病院の柱となる存在で、今は一番需要があるところです」と吉川さんが言うように、近年は気がかりとなるお母さんが増えているそうだ。月に1回、「気がかり親子連絡会」という全部署の看護師・保育士の代表が集まる会議があり、院内で情報を共有している。

「市や町と連携することで、放っておいたら問題を起こしかねないケースが未然に防げていることも多いと思います。安全に産んでもらって、ある程度の育児技術を取得して帰ってもらうことが第一ですが、これからはメンタル的なケアというところにも注力していく必要があるのかもしれません。メンタル的なチェックに関しての研修はずっと行っていて、みんなの意識も敏感になってきています」（吉川さん）

「市や町へ連絡をするほどでない方は、私たちの方で確認を続けることもあります。暗い表情をしていたお母さんが、すこしでも明るくなってくれるとホッとします」（笠松さん）

家族の心配や大変な状況にも寄り添う

小児科は「365日、24時間診ます」と謳う。小児科病棟の看護師・芝梨恵さんは入院している子どもの看護をしているが、夜間勤務では時間外の外来業務や子どもの容態を心配する保護者からの電話応対もしている。

「電話をかけてくるみなさん全てが受診したいというわけでなく、ただ聞きたいだけという方も多く、夜は電話対応に追われることもあります。それでも気軽に電話をしてもらって、気軽に受診できるようにしていくことが大事なのかなと思っています」

共稼ぎが多い福井では、子どもが入院となると家族も大変だ。付添も、何日も仕事を休めない状況の中では、家族総出で交代しながら行うことも多い。芝さんは家族の大変な状況も考慮しつつ、ケアをするように心がけているという。

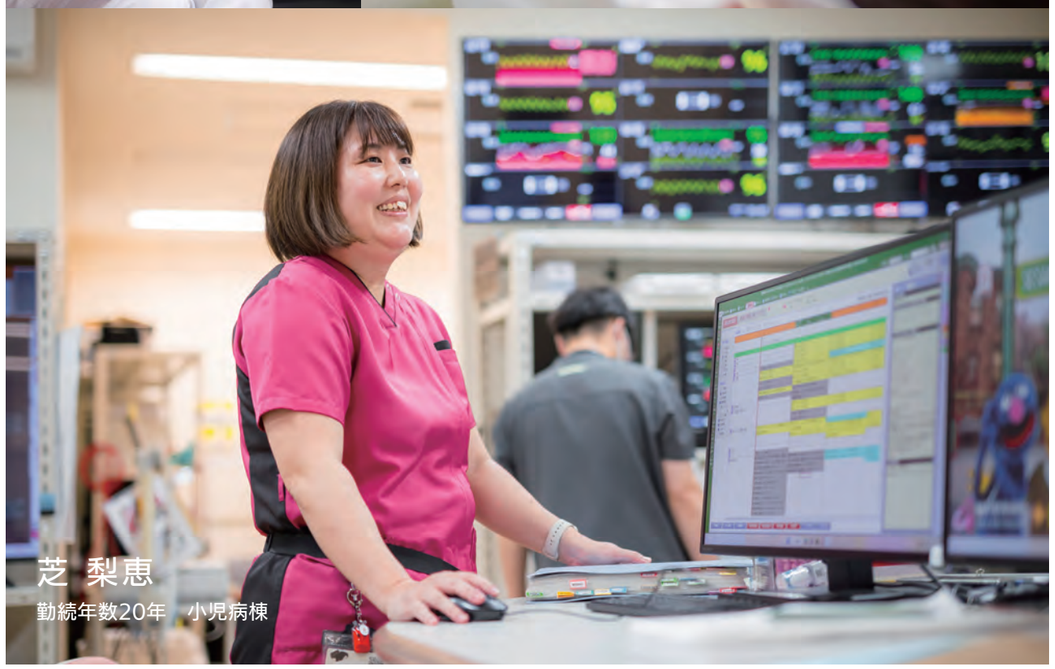
「当院の分娩数が多いのは、何か調子が悪いとなったら分娩室にすぐに小児科の先生が駆けつけてくれることや、その後も何かあったらすぐに小児科の診察があることが大きいです」（吉川さん）

「お産の時に小児科の先生が入ってくるというのは心強いです。赤ちゃんを助けてくれる小児科の先生はみんなかっこいいです」（笠松さん）

オンとオフの切り替えが仕事を長く続ける秘訣

スペシャリストになりたかったから産婦人科の看護師を選び、さらに助産師の資格も取得したという吉川さん。分娩数が多く、たくさんの経験が積め、スキルを磨けることからこの病院を選んだと言う。イライラなどの自分の私的な感情が、患者さんはもちろん、スタッフにも伝わらぬように日頃から気をつけ、また自分の発言の影響力の大きさを自覚して、言ったことには責任を持つことを心がけているという。

「緊急事態でどうしたらいいか分からずに困っている若いスタッフに呼ばれて、スムーズに対処できた時は、経験を生かせたと自己満足かもしれませんがやりがいを感じますね」と笑う吉



芝 梨恵
勤続年数20年　小児病棟

川さんは、マラソンランナーでもあり、毎日20キロのランニングを欠かさない。フルマラソンのベストタイムは2時間52分だそうで、「年代別では敵なしです」ときっぱり。

看護職は就職先がたくさんあり、赤ちゃんが好きなことから助産師の仕事を選んだという笠松さん。助産師になってから「分娩で何かあっても小児科の先生が来てくれないところで働くのは怖い」と思い、この病院に転職してきた。それともう一つは、正常なお産が多いこともここを選んだ理由だ。「やっぱり正常なお産は楽しいですから」と微笑む。休日はゴスペルを歌ってストレス解消をする笠松さん。

「嬉しい時と暗い時の落差が大きい、感情をすごく使う仕事なので、オンとオフを分けないともちません」と言う。

休みの日はクレーンゲームで気分転換をしている芝さん。最近のクレーンゲームの景品はぬいぐるみだけでなく、トイレットペーパーなど実用品もあるのだとか。看護師を目指したのは高校の時、先生に向いていると言われたのがきっかけ。「あまり深く考えずに看護師になろうかなと思いました。子どもが好きなので、小児科の看護師がいいなと思い、この病院に就職を決めたのは家からも近いし、きれいだから」と笑う。新人の頃に、胎盤早期剥離を見逃しそうになったことがあったそうで、命に直結するこの仕事の重さを痛感した。

「その時はこの仕事は怖くて長くは続けられないと思っていましたが、でも気がついたら時が経っていました。やりがいは入院時はぐったりしていた子どもが、元気になって帰っていくところを見送ることですね」

人生を輝かせてくれる やりがいのある仕事

福井愛育病院には5年間働くことという条件付きだが、助産師になるための奨学金と生活費を助成してくれる制度もある。

「社会に出てから自力で勉強して資格を取るのはなかなか難しいですが、この制度を使うと取りやすくなります。もう一つ、この病院は残業が少ないのが私は魅力だと思います」（笠松さん）。

女性と子どものための病院だが、女性が働きながら子育てをするのにもやさしい環境だと3人が口を揃える。

「夜勤は20時30分からなので、家のことをある程度してから出てこられますし、仕事を続けやすいです。時短も相談にのってくれます」（芝さん）

「ちびっこハウスの横で、職員の託児もやっています。子どもが病気になった時、当院の病児保育を利用したり、『休みねの』って言ってもらえる気風もあって、子育てしながら働きやすいですよ」（笠松さん）

「今は2年目以降の院内での教育制度が整っていない部分もありますが、その部分については全体で取り組みはじめたところです。今後その仕組みが整えばさらに働きやすくなると思います。院外研修の受講を支援する制度もあり、自己研鑽できる人であれば、より一層専門性を高められるのが当院であると考えています」（吉川さん）

最後にこれから看護師を目指そうと思っている人や新人看護師の方に、3人からメッセージをいただいた。

「この仕事はやりがいがあるから、自己肯定感が上がります。仕事って人生の大半を占めていますので、人に関われて、役に立てて感謝してもらえる仕事というのは、働きようによっては自分の人生をプラスに輝かせてくれると思います」（吉川さん）

「〝お母さんと赤ちゃんが幸せになりますように〟と、他人の幸せを願ったり、一緒に喜べたりすることってなかなかありませんが、それができるのがこの仕事なんです。長くやってきたおかげで、私が取り上げた子が助産師になって、一緒に働けたのがとてもうれしかった。その助産師が、私が取り上げた子のお産を担当し、そのお産に、私もベビー受け取りとして立ち会うという、人生最大のご褒美もありました。

もう一つは、自分が未熟だったり無知だったりすることが命に直結しますので、申し訳なくしんどいこともありますが、だから一生懸命勉強していこうと思えるのもいいことです」（笠松さん）

「看護師という仕事は大変なところもあるし、怖い思いをすることもあるとは思いますが、やりがいの多い仕事でもあるし、悩んでいても気軽に話せる雰囲気の職場なので、ぜひ一緒に働いて頑張っていきたいなと思います」（芝さん）

産婦人科や小児科の看護師を取り巻く状況は時代とともに変わりつつあるが、人の幸せを願えるすてきな仕事であることは変わらない。お話をお聞きした3人ともの表情が輝いているのは、メリハリのある充実した人生を過ごしているからにほかならないと思った。

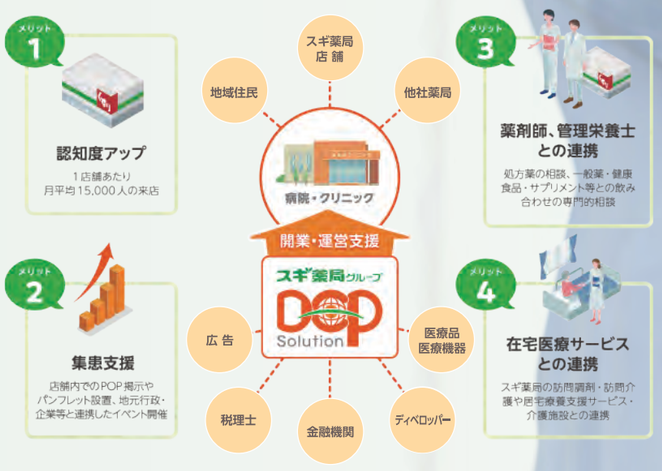
吉川 真弓
勤続年数25年　産婦人科病棟師長

スギ薬局グループ

ドラッグストア併設で
理想の開業を！

DCPソリューションの提供サービス

経営理念、診療方針の作成
開業までのスケジュール作成
開業地の選定、診療圏分析
事業計画の策定
融資の打診及び交渉
設計、内装業者紹介及びアドバイス
医療機器選定
税理士、公認会計士の紹介
広告相談
従業員募集、採用、教育の補助
開設手続き
開業後の経営支援、拡大展開
継承支援



DCPソリューションは
豊富な経験とネットワークを持つ
先生方のよきパートナーとして
開業支援サービスを提供しています。

開業の事例や
先生方の声が
ご覧頂けます

https://dcp-sol.com/article/docvoice/

DCP Solution

0120-911-545
平日（土曜・日曜・祝日を除く）の9時00分～18時00分

拠点

関東エリア（本社）●東京都千代田区鍛冶町二丁目6番1号
堀内ビルディング2階
中部エリア ●愛知県大府市横根町新江62番地の1
関西エリア ●大阪府大阪市淀川区宮原一丁目2番4号
新大阪第5ドイビル13階
北陸・長野エリア ●石川県金沢市藤江北4丁目280番地

想いを伝える、

力を貸してください。

変わりゆく時代に
新しい医療を

この度、第6号を発刊することができました。
取材に協力していただきました医療者の方、
協賛して頂きました企業様におかれましては
心より感謝申し上げます。
今後とも末永くご支援の程よろしくお願い申し上げます。

これからもわたしたちは、はたらく医療者の姿を、
地域の医療界全体へ発信してまいります。

協賛社募集

私たちは「医療情報誌 neo」の活動に
ご賛同いただけるスポンサーを募っています。

neo
MEDICAL INFORMATION MAGAZINE

共創未来

全ては健康を願う人々のために

いつでも、どこでも、正確に、
そして安心、安全に医薬品をお届けする。
それが、全国の医薬品流通を支える
わたしたちの使命。

日々医療機関に足を運ぶなかで、
よりよい医療環境を創るサポートも行っています。

「医療」を支えることは「人々の命」を支えること。
東邦薬品は皆さまと共によりよい未来を創っていきます。

患者さまや医療機関向けの顧客支援システムを開発・提案しています

認知症高齢者・障がい者等
保護情報共有サービス

どこシル伝言板

認知症の人が安心して暮らせる
まちづくりを目指して

QRコードの読み取りで個人情報を開示する
ことなく発見～保護～ご帰宅まで早期解決
地域の見守り事業をサポートします

どこシル伝言板について
詳しくはこちら

※QR コードは株式会社デンソーウェーブの登録商標です。

東邦薬品株式会社

東京都中央区八重洲二丁目２番１号
東京ミッドタウン八重洲 八重洲セントラルタワー９階
https://www.tohoyk.co.jp

当社は東邦ホールディングス株式会社（東証プライム市場）の医薬品卸売事業子会社です

neo

MEDICAL INFORMATION MAGAZINE

福井県内で活躍する医療従事者に焦点を当てた地域密着医療情報誌として、県内の医療機関へ３カ月に一度配布しております。最先端医療から地域医療、また人々の暮らしに寄り添うクリニック、在宅医療・福祉など幅広い分野を取り上げております。この雑誌が福井県内の医療者と医療者を結ぶひとつの情報ツールとなり、福井県の医療活性化に少しでもお役に立てることを目的としております。

バックナンバー紹介

#05 すこやかなる日々を医療と共に。

Doctor's Hand
福井の泌尿器医療のイノベーションに挑む
福井大学医学部附属病院 泌尿器科 教授
寺田 直樹

Medical LANDSCAPE
110 年以上、地域医療の要
医療法人 林病院 病院長
服部 泰章

Nursing School
地域に貢献できる高い専門性と豊かな人間性を備えた看護師を育成
福井県立看護専門学校 校長
西田 美幸

Professor's Voice
難治性眼科疾患と対峙する Surgeon 集団
福井大学医学部附属病院 眼科 教授
稲谷 大

#01
新たな時代を医療とともに。

#02
明るい未来を医療と共に。

#03
つながる思いを医療と共に。

#04
新たな道をを医療と共に。

neo
MEDICAL INFORMATION MAGAZINE

発行／スギメディカル株式会社